

みんなが寄ってたかって てっち上げたわな

「これがあいつのために一番いい方法だ」
なんてさ

しかしさ こいつは明らかに眉つばだあね
そじゃないか

え そじゃないかな な な な

一番都合よいのはほんのところ誰なんだ



死体焼却夫への 恋歌

第六章

また、と思う読者がきつというだろう。この章の作品には、「性」という点で、第二章との共通性があるから。

あえて別章を設けたのはなぜかについて辯じたてることがはしない。性の氾濫の数的処理と思ってもらってもいいし、政治の虚妄が性事に走らせたと解してもいいのである。政（まつりごと）が祭り（まぐわい）にとつて代られる——のだ。

死体焼却夫への恋歌

■小野 妙子

脂のしみた服が好き というわけではない
筋肉労働が好き というわけでもない
きみの働く地下室が好き というわけでもない
煤けて臭い部屋なんそは気分が悪くなるほどだ
だが 君には 手がある
大きな手がある
手があるから
きみの開く扉の音がきこえる
きみのおりていく足音がきこえる
まったく
味噌汁の匂いなどにはおおよそ無縁な
きみの背後を追いながら毎朝わたしは
味噌汁を飲む

きみ

死体焼却夫よ

きみの指に残っている傷が昨日のものであろうと
も何故などと詰問するまい

だが 今日きみの焼く死体には問いかけたい

それはいつかコーヒー店で

熱いコーヒーをすり合った仲間かも知れぬから

子供を殺したとマンモス団地のウエランタで泣い

ていたあの女かも知れぬから

死んでしまったからみんなおなじ

あとは焼却炉で焼くだけ というのでは

あまりに芸のないことではないか

きみに弁別の責はない

だが 労働とも言えぬ単調なリズムで処理されて

いくこの死体に差異はないのか

二十才への郷愁をそそる

遠くに走る急行列車をかぞえながら

きみの焼く解剖死体を確かめたい

わたしを蝕むもの

それは時たま襲う心臓の発作ではない

十月の空に消えていく わたしの手た

右手を差し出すことのない挨拶になれてしまつて

右手の存在を忘れているこの不具な関係が

わたしをきみへ急立てる

きみ

にんげんを焼く人

死体を焼く人

脂のしみた汚れたスポンを漬けて

地下焼却場へおりていく

おお

きみには肢体を支えて

なお あまりある

大きな 手がある

手がある

洞穴の中に

■大門 鉄

ほくたちは生まれた

なんのために、とは問うまい

だがほくたちは何をすればいいのか

指の間から砂のこぼれ落ちるように

まるで手ざわりのない一日が過ぎてゆく

ずつと向うに見えるあれは何だ

ほくたちの死骸か

だがもう言うまい

ほくたちはただうなだれて自分の洞穴に帰って来るのだ

そして、どこかどいつが「前衛」になるだろうかと思つて、じつと外を見ている

みんなもう洞穴の中だ

穴を掘る

■上野 智司

ぼくの知らないところで行なわれる

一つの儀式 囚われた慣習

たよりなくゆれる

まっこうくさい読経のあとで

ゆきついた穴の底に

人びとは何を見つけたさだろうか

無感動に集まる

人垣にかこまれながら

ぼくの型をした

抜けてゆく冷々とした気配

小さなかざりもない内側で

少しずつくずれてゆくのは

投げあげた土ではない

静かに落ちている

枯れた地盤の安らぎ
ぼくのいのちの価値
いま

ぼくは穴を掘る

人びとが掘らないさきに
どこでもいい

気の向いたところに

ぼく自身の穴を掘る

穴

ぼくのこの世に出てきた

しめった産道とは違う

ささくれた贖罪の穴を

そのあばかれた恐怖

逆なでされる みじめな感触のなかで

ぼくは ぼく自身の

さけられない位置を確かめ

死のそばに近寄りながら

穴を掘る

おれたちの非プリズム

■大屋 好子

たとえば、君の赤茶けた髪

を振り乱だした乱立した言葉を

吐き捨て〈愛〉なぞを狂い咲か

そうだったって

そうはさせないぞ！

信用するものか

たとえば君の逆立した惰性理論

は全身に腐着しつづけ、自立的な

不正義のための額をなで廻すよう

な精力は太股の先端の一端にチンマ

リとちちこまった、恥辱だらけの惨めな主題

ミミズは白茶けた君のインポテンツ

君は無能

妄動する巨物たちに引き裂かれる
空の断片

へ知っちまったサー

奇態でもない

醜態でもない

悪態でもなかったら

勝手な虚想は静止！

凶悪な悪名を捨てちまったら

泪を便器の水たまりにかくはんする

黄金の話は天空から降下する聖なる者への

哀惜のメッセージ

明明日

明明明日 おれたちの非プリズム

明日からの〈愛〉は唯一の疲労の残骸

ドームのうた

■ 泉谷 国嘉

牆壁の鞭毛にした、かの一撃をあびてはしき出されて来てみれば
なんのことはない

果てしなく広がるこ、も二度目の牆壁

かすかの奥には灰あかりさえないておいでおいでをくりかえす

ドームの中の暗いねばねば

あいしているから行くのではない

あいされたいから行くのでもない

潜むためといつても探るためといつても嘘になるだろう

それといながら行くこの事実

まったくそれらと裏はらである証拠でもなさそうだ

とにかく

この長いねばねばである

母のやつ女のやつ

つわりを理由におろすことだつてゆるされるこのドームの内側で
うまれた者もうんだ者も含めて

自分の営為が本当に懐しく思われる

そんな日がいつか来るのだろうか

てさぐりて雨の中に出ると

やはりゆうべと同じ速さでドームが展ける

素足で雨を踏む音は

たしか快いはずなのだが

ぼくはもうムンとして漂う

行きつく先が見えるといえはそうとも思える

ちがうといえは或いはとも思う

かつて

女を組み伏せる腕の力のふとひるむ

あのことはなんてあつたか

この疑問だけをたずさえて

ぼくはあと幾年生きられるのか

近親相姦はちかつていけないというから

あがらない幕めがけて声を限りに叫べば

したゝるこたまを確かにかえされたような気がして

骨と骨との間にくまなく纏いつく濡れた毛をおしのけはらいのけ

気ついてみれば

不覚にもまた一步をドームの深みに進めている(個人詩集へかへりみそより)

「あたしの内なる神聖はくずれ」

■堀本 吟

あ あたしの内なる神聖はくずれ
朱くみじかい下着から 奈落へたび立つ直前の
優しい同志は眼をそらす
あ あたしはいろつぼく傾斜して睡り
老いた醜女の掌を享けている
愛と悪徳は山峡の迷路で溺死するさだめ
あたしをつめこんだ銃先を天へ向けた寒い軍
あたしをさえぎるやわらかな連山は喪く
すてにあたしは優しくのびたひと節の臓器で
あ 残情の雨季の神聖はくずれ
火の邑をあたしは火のようにはしる
そのかみの罪ごとを閉閉したから
同志のひげは冷たくあたしこそバラバラの
毛だらけ女

鉛の接吻はあまりにからく
腐爛の窓は浮走してゆきかたしれず
あ あたしの道行きに堕ちた風車の
くるくる舞い光る空の重さ
あたしを償う紫のメット
あたしを縛りつける日蝕の夜更け
あたしの姿勢は狂える海の優雅であつて
あたしは始祖の唇をひきはがしひきよせる
不実の海の水極まで
あたしの朱い下着は永遠の郷愁
同志の愛憐の土地に寝かせ
いつも惨劇を忘れないようにしてやる
あ あたしに神聖はなくなったのだから
稀薄なやみの戦乱をおこし
煙草ぬらし女殺した夕べのような淡い瞳で
窓ならくずれあしたからの笑いは絶えない

■藤原 菜穂子

「薔薇通信」より

次第にはつきりと、獐猛に／それはしたたる血、したたる純潔、禿鷹／街角に立つ巨大な陰茎の上で夜毎、儀式される薔薇。太陽の軋かりまわる血、ライオンの流れる血。／今夜、太陽は雨にぬれているけれど、あした あさつて／太陽が7つにふえて、いつせいに軋り、燃え出すかもしれない。そのとき夜は／永遠にわたし達に、こなくなるだろう。

夜あけ、大きな虹の燃えている夢をみた。
窓力ラムを、水蒸気かのほつていった。

…使いたくない

■ 渋谷 修三

タバコ、定期券、ボールペン、カギ、本、
金、宿題、仕事、時刻
いつも 何かを どこかへ 忘れる
わたしは何もいらわないのだから
わたしのものなんてないのだから
名前も誕生日もいらない
言葉もいらない
喜びのないまちの悲惨なニュースをきく
ために耳があるのではない
開き直りの死字の羅列を解説するために
勉強しているのではない

しまい込んで取られやしないと電気を
流したりカギをかけるのはみぐるしい
きれいなまちでわたしのまちって何かなって
考えたい

わたしのまちがあるならわたしがまもる
憎しみや欲望のないときに愛って何かなって
考えたい

わたしは名前なんかいらない
番号なんかいらない

わたしは逃げない
わたしは撃たない

無意味な鳴声を投げ合わなくても
わかりあえる微笑を

人間らしいなんて言葉は使いたくない
愛なんて言葉は使いたくない

異国

■ 高山 博

ひとすじの朝の中に二人が重さなることはあるだろう
たまらなく好きな旋律があるものだ

シーツの皺は常に思慮深いのか

あなたの片腕はやはり 突然

中空へ向って突き出されるのだった

どのような言葉も広島を語る事にはならない様に

「私たち」は高木のほりつめたと

云うべきなのか

閉ざされたドアの内側では言葉は言葉である

光とはなんてあろうか

私かあなたと口をききたいのは今

このような今なのだ

——今日はほんとうによい天気でしたねえ！
と

たまらなく広がる私自身はけっしてあなたを

潤してはいない

縫らないで欲しい

叫ばないで欲しい

シーツの深い谷間にあって

「私」は私自身である

深い中空の中で別れた「私たち」は

朝の光の中で再び出会う

私たち——

ああ今日もよい天気なのだ

扉をひらくと

道路はいつも掘りかえされていて

今日も異国のようにふくらんでいた



最後の意志

あのように死ぬのだ

かつて彼の死ぬときに見たように――

彼は私の暗い青春にさるで神さまのように
電光さながらのまなざしを投げてくれた友だった

奔放で深く

戦いのさなかにあっても舞踏者であった――

戦士たちのあついで最も朗らかな男

勝利者たちのあついで最も沈痛な男

自分の運命の上に一つの運命とくま立ち

きびしく 思慮深く 細心だった――

勝利をおさめたというときに戦慄し
死によって勝利をえたことに歓喜し

命令しながら死んでいった彼

――彼は命じられた 絶滅すべしと……

あのように死のう

かつて彼の死を見たときのように

勝ちながら

絶滅しながら……

紫色すみれ